教育コラム「愛のかけはし」

平成２４年　６月
江差町教育委員会
学校教育課

『失敗を乗り越える力』

「子どもの良いところを少しでも見つけ、ほめて育てることが良いことだ」
こんな考え方が、学校でも家庭でもしごく当たり前のように広まっている昨今である。しかし、北海道教育大学の伊藤進教授は、「ほめる教育には」思わぬ落とし穴が潜んでいると警告している。

ある幼稚園での出来事である。ある子どもが来園の方に「ねえ、見て」と制作物を持ってきた。それを見た来園の方が「すごいねえ！よくできているね」と褒めたところ、「じゃこれあげる」とその子は言った。
ここまではごく普通に見られる光景かと思う。ところが、その方が「うれしいけど、よくできたのだから自分で大切に持って帰ったら。」と答えたら「なんだ！」と言ってそれを思い切って投げつけて向こうへ行ってしまったという。

どういうことか？この子は思いを込めて作ったのではなく、「ほめて」もらいたくて作ったのではなかったのか。しかも、いつも褒められることに慣れ、褒められたからといってそれほど嬉しいという感覚がなくなってしまっているということではないだろうか。

今、多くの親は自分の子どもに対して沢山褒めてやることがその子の自信につながると考えている。また、子どもが失敗したのにそれでもやたらに褒める親もいる。例えば、「間違えたけれど、よく頑張ったね」などと。
子どもの行いや成績を自然に褒めるのではなく、褒めることで子どものやる気を伸ばそうとか、失敗しても励まそうという意図が「ほめる」という評価に込められているからだ。

ところが子どもへの過剰な褒め言葉は反って子どもの成長の妨げになることが多い。褒めることが子育ての手段になっているわけで、こうした「ほめる」教育に子どもが慣らされると弊害が生まれてくる。
ちょっと叱られただけでも大きなショックを受け、失敗を乗り越える力がなかなか育っていかない。子どもは失敗を繰り返すことで多くを学んでいくものだが、「ほめる」教育は、子どもが失敗を真の意味で体験する機会を奪ってしまうからだ。その結果、大人から注意されたり、叱られたりすることを極端に嫌う子どもが増加傾向にある。

このまま、「ほめる教育」が定着してしまうと、日本では主体性や自主性を欠いた人間が多くな

ってしまわないか心配だ。
　進学して間もなくの中学生を見ていて思うことがあった。叱られ慣れていない生徒が沢山いる。駄目なことはだめが通用しない。駄目と言われるといじけてしまう生徒。自分にできなかった非があるのに言った相手を悪く言う生徒。叱られたショックで学校に来れなくなる生徒等など。
　そんな生徒達の親から、学校では何を指導しているのですかと問われるが、その実は鍛え上げられてこなかった子どもたちの現実に戸惑っている親の姿が垣間見られた。

　では、どのように子どもを褒めてやったらいいのか。
やり遂げるまで見守る。しっかり見ているけれども、手は出さないという意識をもって子どもを見守り、完成の喜びをともに味わうことだ。
　そのためには、先生、親が子どもと双方向のコミュニケーションを培うことが大切だ。その上で、自然な愛情から褒めていくのが基本だ。ただし、子どもの行動面でのしつけはしっかりとすべき。テレビゲーム機などを安易に買い与えることはしないことだ。

　私の孫は間もなく５歳になる。その孫から相談を受ける。「じいじ、ほしいものがあるの。りかちゃんの着せ替えがないの。ベットもまくらもないの。」
　紙で作ってみようかと孫と二人でベッドはチラシを折りたたんで重ね、枕はティッシュを折りたたんで作った。そんなベッドと枕に満足した孫は、着せ替えは自分でティッシュを上手に人形に巻き付け、ドレス風に仕上げた。腰のベルトはティッシュを紐状にし上手に巻きつけ、白い手作りの素敵な着せ替えが出来上がった。

　今、私は自分の子育てを反省しながら、孫とともにいろいろなことを、自分も肌で感じたいと思っている。大切にしていることは、子育ての技術ではなく、孫を一人の人間として尊重する愛情なのだと思って・・・。